

J.S.バッハ:クラヴィーア練習曲集第3巻

Johann Sebastian Bach (1685–1750): Dritter Teil der Klavierübung

DISC 1

- ① 前奏曲 変ホ長調 BWV552/1
Praeludium in Es BWV552/1
- ② キリエ、とこしえの父なる神よ BWV669
Kyrie, Gott Vater in Ewigkeit BWV669
- ③ キリストよ、世の人のすべての慰め BWV670
Christe, aller Welt Trost BWV670
- ④ キリエ、聖霊なる神よ BWV671
Kyrie, Gott heiliger Geist BWV671
- ⑤ キリエ、とこしえの父なる神よ BWV672
Kyrie, Gott Vater in Ewigkeit BWV672
- ⑥ キリストよ、世の人のすべての慰め BWV673
Christe, aller Welt Trost BWV673
- ⑦ キリエ、聖霊なる神よ BWV674
Kyrie, Gott heiliger Geist BWV674
- ⑧ いと高きところでは神にのみ栄光あれ BWV675
Allein Gott in der Höh sei Ehr BWV675
- ⑨ いと高きところでは神にのみ栄光あれ BWV676
Allein Gott in der Höh sei Ehr BWV676
- ⑩ いと高きところでは神にのみ栄光あれ BWV677
Allein Gott in der Höh sei Ehr BWV677
- ⑪ これぞ聖なる十戒 BWV678
Dies sind die heiligen zehn Gebot BWV678
- ⑫ これぞ聖なる十戒 BWV679
Dies sind die heiligen zehn Gebot BWV679
- ⑬ われらみな唯一なる神を信ず BWV680
Wir glauben all an einen Gott BWV680

DISC 2

- ① われらみな唯一なる神を信ず BWV681
Wir glauben all an einen Gott BWV681
- ② 天にましますわれらの父よ BWV682
Vater unser im Himmelreich BWV682
- ③ 天にましますわれらの父よ BWV683
Vater unser im Himmelreich BWV683
- ④ われらの主キリスト、ヨルダンの川に來れり BWV684
Christ, unser Herr, zum Jordan kam BWV684
- ⑤ われらの主キリスト、ヨルダンの川に來れり BWV685
Christ, unser Herr, zum Jordan kam BWV685
- ⑥ 深き淵より、われ汝に呼ばわる BWV686
Aus tiefer Not schrei ich zu dir BWV686
- ⑦ 深き淵より、われ汝に呼ばわる BWV687
Aus tiefer Not schrei ich zu dir BWV687
- ⑧ われらの救い主なるイエス・キリストは BWV688
Jesus Christus, unser Heiland BWV688
- ⑨ われらの救い主なるイエス・キリストは BWV689
Jesus Christus, unser Heiland BWV689

4つのデュエット BWV802-805

4 Duette BWV802–805

- ⑩ 第1曲 ホ短調
Duett in e BWV802
- ⑪ 第2曲 ヘ長調
Duett in F BWV803
- ⑫ 第3曲 ト長調
Duett in G BWV804
- ⑬ 第4曲 イ短調
Duett in a BWV805

⑭ フーガ 変ホ長調 BWV552/2

Fuga in Es BWV552/2

吉田 恵(オルガン)

Megumi Yoshida (organ)

2014年8月4-6日 ズヴォレ、聖ミハエル教会にて収録

Recording Date: 4–6 Aug. 2014

Recording Location: Zwolle, St. Michael Church

Executive Producer: Tomoyoshi Ezaki

Producer: Hiroshi Hirai

Balance Engineer: Tomoyoshi Ezaki

Assistant Engineer: Masashi Minakawa

Photographer: Ayaka Fukahori

Cover Design: Mie Shimosako



使用楽器について

金澤 正剛

ヨーロッパ最西北端、アムステルダムからアイセル湖を隔てて東岸の内陸部に古都ズヴォレはある。その歴史は古く、先史時代にはすでに集落が存在し、西暦800年頃にシャルルマーニュ（カール大帝）によってフランク王国の、この地域の中心地として都市の建設が始まり、商業の中心としても栄えるようになった。ちなみにズヴォレとは「膨れる（英語のswellと語源は同じ）」という意味から、「丘」を意味していた。それはアイセル湖に流れ込む4つの川に囲まれた小高い丘に位置し、洪水の時にも水没することが無かったからであるという。

町の最盛期は15世紀であったが、それに先立ってキリスト教の活動も活発で、1230年8月31日には正式にユトレヒト司教区に加わったことが記録に残っている。その宗教的活動の中心となったのが「大教会」の名でも知られる聖ミハエル教会で、1200年頃にはすでに存在していたことが知られているが、15世紀には異例の高さの塔を誇る大聖堂に建てかえられた。ところがそのためにたびたび落雷を受け、火災を起こし、1682年にはついに崩壊してしまった。新しい聖堂を建設するにあたって、それにふさわし

いオルガンを設置することが決まり、その依頼を受けたのが北ドイツを代表するオルガン建造家アルプ・シュニットガー Arp Schnitger (1648-1719) であった。

ところがシュニットガーは、そのオルガンを設計し、製作に取りかかったところで死去してしまった。そこでこのオルガンの完成は息子フランツ・カスパーの手に委ねられ、その結果まず3段手鍵盤、46ストップの楽器として完成されたのが1721年のことであった。しかしその後もストップ数を増やすなど、改築や修理が何度となく繰り返され、今日に至っている。例えば1751年にはフランツ・カスパーの協力者で、後にその未亡人と結婚したアルベルト・アントニ・フィンツ A. A. Finsz (1704-1785) が修理を手がけ、ペダル鍵盤を交換した。1787年にはアルプの孫フランツ・カスパー・シュニットガー 2世とその協力者ハインリヒ・ヘルマン・フライタークが修理を行い、1837年にはペトルスとエーケレンが大幅なデイスポジションの変更を行うなど、その後も数度にわたって変更や修理が続けられ、1936年にはペダルのトラッカーが電動化されるようになった。

ところが20世紀も後半に入ったところで、古楽の復興と古楽器の復元の風潮が高まり、オランダのオルガン製作者ディルク・アンドリース・フレントロップ Dirk Andries Flentrop (1910-2003) がこのオルガンを基本的に1721年の状態に復元した。ピッチを元

の状態で(491.6)に戻し、それまでに追加されたパイプなども再利用して、トラッカーや鍵盤を修復したのである。彼はまた1985-89年には全面的に整音を行い、4つのふいごと風荷重を修復している。また2013年にはフレントロップ社による大規模なふいごの交換が行われ、今日に至っている。

アルプ・シュニットガー最後の作として知られるズヴォレのオルガンは、今日4段主鍵盤とペダル、64のストップを持ち、バッハの作品を演奏するのに最も理想的な楽器として知られている。主鍵盤 Hoofdwerkはそのストップ数14で、16フィートのストップを3つ備え、プリンシパル系は4つ、フルート系は3つ、トランペット系は2つで、その他にミクスチュア系3つ、3フィートのナザールと8フィートのヴォックス・フマーナを持っている。リュックポジティブ Rugwerkは12のストップを持ち、そのうちシャルメイを加えて8フィートは4つ、それに16フィートのファゴットにミクスチュア系が3つ、あとはプリンシパル系とフルート系が2つずつという組み合わせである。

ウンターヴェルク Onderwerk (楽器の下の部分) は14のストップを持ち、4つの8フィート管のうち、2つはヴィオラとヴィオラ・ダ・ガンバと、細いパイプの弦系のストップであることに特徴がある。5つのプリンシパル系のストップのうち、2つはクウィンタ (完全5度、またはその1オクターヴ上の音を出す) であるこ

とも独特で、あとはフルート系が3つ、ミクスチュアが3つ、そしてそれに4フィートのトランペットが加わる。ブルストヴェルク Borstwerk (楽器の胸にあたる部分) の3つの8フィート管はフルート・ゲダクト、ドゥルシアン、レガールと、木管系カリード管で、プリンシパル管は4フィートとその1オクターヴ上、及び1オクターヴと5度上の3つのみである。一方フルート系は5つと多く、ミクスチュアは2つと少ない。

ペダルは12のストップのうち、3つまでが16フィートであるが、さらにそれよりも低く32フィートのファゴットが加わり、重量感あふれる音色を加えている。それに加えてプリンシパル管、フルート管、トランペット管が2つずつ、そして2フィートのコルネットとミクスチュアが1つずつある。このように、4つの手鍵盤とペダルのそれぞれに独特のストップの組み合わせが見られ、音色の変化に可能性が広がり、オルガニストにとってはまさに腕の見せどころを披露出来るような素晴らしい楽器であると言える。

演奏者について

オルガニスト吉田恵は、東京藝術大学に学び、修士課程を修了した後ドイツに渡り、ハンブルク大学で学んだ。ハンブルクといえば北ドイツのオルガンの伝統の中心地であり、特に名工アルブ・シュニットガーが手がけたオルガンが数多く残っていることでも良く知られている。吉田にとって、ハンブルクの聖ヤコブ教会や聖ヨハネ教会、オランダ北部のフローニンヘンの聖マルティン教会、ズヴォレの聖ミハエル教会などに設置されたいわゆる「シュニットガー・オルガン」に直接接したことは、以後の彼女の演奏生活に決定的な影響を与えたことには疑う余地もない。事実彼女にとってのデビューは、1994年4月にハンブルクの聖ヨハネ教会のコンサート・シリーズに出演した時のことであった。

その1994年に帰国した吉田は、すぐさま活発な演奏活動を開始し、北は札幌から南は宮崎まで、オルガンのある数多くの主要コンサートホールで公演を行ってきた。1998年には愛知県立芸術大学において、今回ズヴォレで録音したバッハの『クラヴィアユーブンク第3巻』について公開講座と演奏を行い、特にバッハのスペシャリストとして知られるようになっている。また1998年4月から4年間新潟市民芸術文化会館の専属オルガニストを、2006年4月から3

年間ミュンヘン・ザルツブルグ・シムフォニー・ホール（現・ザルツブルグ・モーツァルト・ホール）のオルガニストを務めるなど、地域の音楽活動にも大いに貢献している。

2004年12月から2010年3月にかけて、カザルスホールのアーレント・オルガンによるバッハオルガン作品全曲演奏を果たしたが、それは新バッハ全集による日本人としては初めてという快挙であった。そして次にはシュニットガー・オルガンで、バッハのオルガン作品全曲を録音することを思い立ち、まず2012年1月に、続いて2013年11月に、フローニンヘンの聖マルティン教会のオルガンを用いて2枚のCDを出している。そして今回はズヴォレのオルガンによる『クラヴィアユーブンク第3巻』の演奏となったわけである。現在愛知県立芸術大学と日本大学芸術学部で教鞭をとり、カトリック吉祥寺教会のオルガニストとしてますます活躍中である。今後の活躍に大いに期待したい。

曲目解説

ヨハン・ゼバスティアン・バッハ Johann Sebastian Bach(1685-1750)は1731年から1742年にかけて、4巻からなる『クラヴィアユーブンク Klavierübung』を出版した。その題名を直訳すれば「鍵盤音楽曲集」となるが、4巻のうちの3つまでは明らかにチェンバロ用であり、1739年に出版した第3巻のみがオルガン用となっている。しかもその構成が聖餐式の式次第によっているため、明らかに礼拝で用いることを意識して作曲していて、そのため一般には《オルガン・ミサ曲》の名でも知られるようになった。

曲集は礼拝の前奏用として書かれた前奏曲に始まり、後奏用のフーガで終わる。これら2曲はいずれも変ホ長調で書かれているため、連続して《前奏曲とフーガ》として演奏しても全く違和感が無い。そのため演奏会などでこの2曲だけを演奏することは盛んに行われるところであり、作品番号もBWV552と、同じ共通の番号が付けられている。これら2曲に挟まれて、21のコラールにもとづく作品、4つの短いデュエットが並ぶ。バッハが属していたルター教会においては、創立者のマルティン・ルター Martin Luther(1483-1546)が主張した「礼拝では音楽を聖歌隊とオルガニストに任せないで、会衆一同が主なる神に向かって声を合わせて歌うことが大切であ

る」という基本的考え方に従って、衆賛歌であるコラールが特に重要な位置を占めるようになった。ただし、それを会衆が歌うだけでなく、コラールにもとづいてより複雑な作品を作曲して聖歌隊が歌ったり、その旋律にもとづいてオルガニストが演奏したりすることもルターは奨励した。それは彼の「あらゆる手段を用いて主を讃えよう」という基本的態度によるものである。

この曲集には合わせて10のコラールが含まれているが、コラール1つに対して少なくとも2通りの編曲が示されている。しかもその場合、ひとつはペダル付きのより大がかりな作品で、もうひとつはペダル無しのより簡単な編曲となっている。すなわち大オルガンのあるような教会で祝典的な礼拝も出来るし、小さなオルガンしかない教会で慎まやかな礼拝を行うことも出来るように配慮したことになる。またコラールの中には、もともとカトリック典礼で歌われたミサ通常文のローマ聖歌（グレゴリオ聖歌）によるものもある。実はルター教会ではカトリック教会の習慣を尊重して、聖餐式をカトリックのミサ典礼に従って行うことも少なくなかった。この曲集の内容からは、これらの曲がそのような古来のカトリック典礼に従った礼拝に用いるために編集された意図が見てとれる。すなわちカトリック・ミサの通常文「キリエ」にもとづく6曲、「グローリア」のコラール版

である《いと高きところでは神に栄光あれ》3曲、「クレド(信仰告白)」のコラール版である《われらみな唯一なる神を信ず》2曲は、聖書朗読を中心とした礼拝の前半で演奏されるものである。またその間に挟まれた《これぞ聖なる十戒》はおそらく聖書朗読の前後で演奏するための曲であろう。また《天にましますわれらの父よ》は「主の祈り」として知られる祈りの言葉で、礼拝の後半で祭壇に供えられたパンと葡萄酒が聖別され、聖体となったところで会衆一同で唱える祈りである。最後に3つのコラールによるそれぞれ2通りの編曲は、恐らくはその後、聖体拝領の際に演奏されることを意図したものであろう。またそれに続く4つのデュエットは、必要に応じて礼拝の適当な場所で演奏されるために書かれたものと思われる。このようにして検討してみると、バッハがいかに綿密にカトリック典礼に従ったルター教会の礼拝形式を意識しながら、この曲集を編集したのかが分かる。

礼拝の序奏にあたる《前奏曲 変ホ長調》BWV552／1は、フランス風序曲のリズムを思わせる力強い合奏に始まり、続いて付点音符のリズムが印象的な主題による5声部の対位法的展開が繰り返される。この合奏風な部分は曲全体を通じて4回繰り返され、その間に演奏される間奏風な部分は基本的に3声部で書かれている。つまりこの曲は形式的にはロン

ドで、様式的にはトリオ・ソナタ風間奏を交えたコンチェルト・グロッソの基本で作曲されている、ということも出来よう。最初の間奏では軽快なモティーフにもとづく主旋律が最高声部に現れ、下の2つの声部はそれを和声で支えるというホモフォニックな書法によっている。従って重厚な合奏部分とは対照的に軽いリズムが印象的で、ほっとした気分さえ感じられる。第2の間奏はまず下向音階で始まり、楔形の細かい動きが続くが、それを主題として3声のフーガが展開される。第3の間奏ではまず第1の間奏の主題が現れ、新しい展開を示した後、第2の間奏の主題が現れ、フーガの展開を続ける。すなわち合奏の部分をA、第1の間奏をB、第2の間奏をCと表示した時、全体の構成はABACABCAと表示することが出来ることになる。

こうした曲の構成、そしてそれぞれの部分の様式を分析した結果、ここでバッハはキリスト教の基本的考え方である三位一体を表現しようとしたのではないかという説があり、伝統的にかんがりの支持を受けている。すなわちAは父なる神であり、Bは御子イエスを象徴する。イエスは人間の救済のためにこの世に生まれ、人々の間で生活したということで、より親しみやすい音楽で表現されている。また聖霊を象徴するCの冒頭で下向音階が現れるのは天から下ったことを示し、楔形の動きは聖霊が使徒たちに

とどまってさまざまな地方の人々への布教へ向かったことを示す、という解釈である。さらに第3間奏でBの後Cが繰り返されるのは、イエスの受難と復活の後を受けて、聖霊が人々の心に留まり、全世界にキリスト教が伝わることを示したもので、そのような働き全体を父なる神の気高さと力強さを表すAが包み込んで、全体をまとめ上げている、ということになる。

ルター教会の聖餐式では、カトリック典礼に従って、礼拝の最初に《憐みの賛歌(キリエ)》にもとづくコラールを歌うことが多い。元の聖歌では「キリエ(主よ、憐れみたまえ)」を3回、「クリステ(キリストよ、憐れみたまえ)」を3回、そして最後に再び「キリエ」を3回歌うのが習わしであるが、それにもとづくコラールの中にはそれを3部からなる旋律として、そのそれぞれにドイツ語の解釈を付け加えた例がある。旋律もローマ聖歌(グレゴリオ聖歌)のキリエ第2番《良き泉なる主よ Fons bonitatis》として知られる、重要な祝祭日に歌われるもので、それがコラールでは第1部《キリエ、とこしえの父なる神よ Kyrie, Gott Vater in Ewigkeit》、第2部《キリストよ、世の人のすべての慰め Christe, aller Welt Trost》、第3部《キリエ、聖霊なる神よ Kyrie Gott heiliger Geist》となった。すなわちここでもまた3つの部分は父なる神、御子イエス、そして聖霊の三位一体を

示しているわけである。バッハはこれら3部を1組として、2通りの編曲を残している。

ペダルを伴うより大規模な編曲の方では、カトリックの聖歌の旋律をほぼそのまま引用して用いている。すなわち聖歌の旋律は、《キリエ、とこしえの父なる神よ》BWV669ではソプラノ(右手)に、《キリストよ、世の人のすべての慰め》BWV670ではテナー(左手)に、《キリエ、聖霊なる神よ》BWV671ではバス(ペダル)に置かれている。こうした聖歌の旋律の動きは、見方によっては、天にまします父なる神、地上に遣わされた御子、そして聖霊の働きによって信仰の道へと進むキリスト教徒たちを象徴すると考えることも出来よう。一方ペダル無しの編曲では聖歌からモティーフを取り出して、それを主題に4声の短いフーガが展開されるが、《キリエ、とこしえの父なる神よ》BWV672は3拍子、《キリストよ、世の人のすべての慰め》BWV673は6拍子、《キリエ、聖霊なる神よ》BWV674は9拍子と、同じ3拍子系のリズムが次第にかけ合わされていくが、これまた父なる神に御子が加わり、最後に聖霊も加わるというように、三位一体を象徴しているものとも思われる。

カトリック典礼では聖歌《キリエ》に続いて《グロリア(栄光の賛歌)》が歌われるのが習わしであるが、そのコラール版である《いと高きところでは神にのみ栄光あれ Allein Gott in der Höh sei Ehr》を、

バッハは3通りの編曲に書き残している。コラールの作者はニコラウス・デツィウス Nicolaus Decius (1485頃～1546以後)で、ホーフ・アン・デア・ザーレの名家に生まれ、ライプツィヒ大学に学び、ベネディクト派の司祭となったが、福音派の思想に同調して、1523年にヴィッテンブルクに赴き、翌年にはルターの推薦を得て、牧師として活躍することとなった。それに先立ち彼はドイツ語によるマタイ福音書の注釈書を書き、さらにカトリック典礼の通常文のうちからグローリア、サンクトゥス、アニュス・デイをドイツ語のコラールに書き変えて1523年に発表した。それはコラールとしても歴史的に最初の例のひとつと考えられる。バッハが取り上げたのは、その3つのコラールのうちの最初の旋律であった。

このコラールにもとづくバッハの3つのコラール編曲のうち、第1曲BWV675はへ長調、3拍子の曲で、マニユアリテール(両手のみで演奏するペダル無し(の曲))の作品である。コラールの冒頭のモチーフを主題をまず右手が、次に左手が弾いて模倣を展開したところで、中間部にコラールの旋律が定旋律(装飾無し)として現れる。第2曲BWV676はト長調、6拍子のペダルを伴う作品で、トリオ・ソナタの様式で書かれている。主題は動きの激しい装飾によって変容され、まず右手で、次に左手で提示されて模倣となり、それをペダルが支えるが、装飾無しの元の

旋律も左手、右手、ペダルと断片的に現れる。第3曲BWV677は長調、4拍子は再びマニユアリテールの3声のフーゲッタで、その主題には跳躍が多く、一見コラールの旋律には関係ないようにも思われるが、良く見るとコラールの冒頭のモチーフが暗示されていることに気づく。

旧約聖書の出エジプト記第20章にもとづくコラール《これぞ聖なる十戒 Dies sind die heiligen zehn Gebot》はルター自身の歌詞によるが、その旋律はむしろ《神の御名のもとわれらは行く In Gottes Namen fahren wir》の歌詞で良く知られている。バッハの2通りの編曲は、いずれもト長調で作曲されている。1曲目のBWV678は6拍子で、まずペダルに支えられて上の2声部が序奏風の模倣を展開したところで、その下でコラールにもとづく2声のカノンが展開される。マニユアリテールの第2曲BWV679では、コラール旋律の冒頭に現れる音の反復を効果的に用いた12拍子の主題による、4声のフーゲッタが展開される。

ミサの通常文クレド《われらみな唯一の神を信ず Wir glauben all an einen Gott》はキリスト教徒にとっては信仰宣言にあたるため、特にプロテスタント教会では歌わずに、全員で唱えることが多いが、バッハはそれにも2通りの編曲を書いている。より規模の大きいBWV680はニ短調で、コラールの旋律が

動きに富んだ主題に書き変えられ、3声のインヴェンション風の様式で展開する。それにペダルがしばしば山形の旋律型を含むバスで支え、全曲の構造を引き締める。一方マニユアリテールのBWV681はホ短調で、コラール旋律の冒頭のモチーフを用いた3声のフーゲッタであるが、全曲を通してフランス序曲的なリズムが続くのが印象的である。

主の祈りである《天にましますわれらの父よ Vater unser in Himmelreich》の2つの編曲のうち、より大規模なBWV682はホ短調、3拍子で、まず表情豊かで華麗な動きを含む旋律が左右両手で模倣を展開し、それにコラール旋律によるカノンが加わり、その全体をペダルが支えるという極めて壮大な構造によっている。マニユアリテールのBWV683はニ短調、6拍子で、コラール旋律は最上声部に置かれ、それを支えて下の3つの声部が音階的に動く対旋律で模倣を続ける。

洗礼のコラールとして知られる《われらの主キリスト、ヨルダン川に來たれり Christ, unser Herr, zum Jordan kam》は詩も旋律もルターのものでされ、1524年のコラール集で発表されている。ペダル付きのBWV684はハ短調、4拍子の編曲で、コラールの旋律はペダルによって堂々と歌われる。それに対して上声部では跳躍の多い主題による模倣が展開されるが、その間で左手に現れる16分音符の激しい

動きを続ける旋律は、明らかにヨルダン川を描写したものである。マニユアリテールのBWV685では、まず最上声部がコラールの旋律を歌い始めるが、それに応えてバスがその反行型を弾く。

悔悛のコラール《深き淵より、われ汝に呼ばはる Aus tiefer Not schrei ich》もまた、旋律歌詞ともにルターの作として知られる。バッハの第1曲BWV686はホ短調2拍子の編曲で、コラール旋律による雄大な6声の対位法が展開するが、そのうち2声はペダルによるカノン風のやり取りなので、オルガニストにとっての聴かせどころとなっている。一方マニユアリテールのBWV687は嬰へ短調2拍子の編曲で、まず下の3声部でコラール旋律のモチーフにもとづく模倣が展開したところで、最高声部に定旋律が現れる。

聖餐のコラール《われらの救い主なるイエス・キリストは Jesus Christus unser heiland》もまたルター自身の作として知られる。ペダル付きのBWV688はニ短調3拍子の編曲となっていて、跳躍を含む華麗な主題による2声の対位法が展開されたところで、コラールの旋律が力強くペダルに現れる。マニユアリテールのBWV689はへ長調、4拍子の編曲で、コラール旋律の冒頭のモチーフを主題とした4声のフーガとなっている。

コラール編曲に続く4つのデュエットは、バッハの

作品を整理してBWV番号を付けたシュミッターが
チェンバロの作品と考えたため、過去においてはそ
のように分類されてしまったが、恐らくは必要に応
じて礼拝でオルガンが演奏する曲として作曲された
ものである可能性の方が強い。なぜ4曲のかに関
しては、東西南北、または宇宙の四元素など、象徴
的な意味があるのではないかという説もあるが、確
かなことは分かっていない。いずれにせよ4曲とも、
2声のインヴェンションと呼んでも良いような作品で
ある。第1曲BWV802はホ短調、3拍子で、平行3度
や6度で流れるように動く2つの旋律が特徴的であ
る。第2曲BWV803はヘ長調で、歯切れの良い2拍
子の主題が模倣を展開し、曲全体はダ・カーボ形式
をとる。第3曲BWV803はト長調で、のびのびとした
12拍子のリズムに乗って、上下の旋律が会話を続け
る。そして第4曲BWV804はイ短調で、2拍子の長め
の主題がまず左手に、続いて右手に現れて、フーガ
を展開する。

曲集の最後を飾る《フーガ変ホ長調》BWV552／
2は、一般に「聖アン」のフーガ」とも、「三位一体の
フーガ」とも知られている名曲である。曲全体は
はっきりと3つの部分から構成されていて、それぞ
れの部分が独自の主題を持つという三重フーガと
なっている。そしてそれらの主題はそれぞれ父なる
神(2拍子)、御子イエス(6拍子)、聖霊(12拍子)を

象徴するとも考えられ、それが「三位一体」という呼
び名の由来となっている。また最初の主題は「聖ア
ンの主題」として知られるイギリスの讃美歌(日本で
は讃美歌第88番「過ぎにし昔も」として親しまれて
いる)の旋律に似ているため、そのような呼び名が
付くこととなった。

(かなざわ・まさかた)

アルプ・シュニットガー最後のオルガン

吉田 恵

アルプ・シュニットガー最後のオルガンは、オラン
ダ東部、ズヴォレの聖ミハエル教会にある。ズヴォ
レは、歩いて回りきることの出来る小さな街である。
四つの川に囲まれ、緑豊かなこの街は、西暦800年
頃、カール大帝によって設立された。街のシンボル
である聖ミハエル教会は、大教会とも呼ばれ、
1200年頃には現在の建物の基礎となる聖堂が建て
られた。15世紀には、異例の高さを誇る115メートル
を超える塔が立てられたが、度重なる落雷によって
1682年に崩壊、その際、それまで使われていたオル
ガンも消失してしまった。1686年に新しく八角形の
教会堂が建造され、それに合わせて新しいオルガン
の建造が計画された。

アルプ・シュニットガーがここを訪れたのは、彼の死
のおおよそ半年前に当たる、1718年から1719年にか
けての冬である。シュニットガーはここに、4段鍵盤63
ストップという、当時としては、最大規模のプロスペク
トを提案し、契約を結んだ。しかし、1719年の7月、北
ドイツのノイエフェルトで没したため、このオルガン
の建造は、息子ヨハン・ゲオルグとフランツ・カスパー
に引き継がれた。オルガンの建造は、通常家族間で

受け継がれていくことが多い技術である。シュニット
ガーは、ペーレント・フスの下で修行をし、技術を習得
したが、家族は祖父の代からの家具職人であった。
父親がゴルツヴァルデンのオルガン製作に関わった
記録はあるものの、オルガン工房を構えたのは、アル
プ・シュニットガーが始めてであった。北ドイツ、イギ
リス、ロシア、スペイン、ポルトガルのヨーロッパの広い
範囲で、生涯に亘って100基以上のオルガンを製作し、
わずかに一代で名匠と呼ばれるに至ったのである。さ
らに、その技術と芸術性は50人以上の弟子達と息子
達に受け継がれ、北ドイツだけでなく、北ヨーロッパ
全体に波及していったのである。

ズヴォレのオルガンは、シュニットガー特有の精彩
で華麗な響きと、息子フランツ・カスパーの作品に
共通する柔らかく美しい響きを併せ持っている。そ
の多彩な響きは、バッハのオルガン作品が持つ荘厳
さや華麗さ、また叙情的な表情、そして敬虔な恐れ
までもを表現することが出来る。このようなオルガ
ンを使って、バッハのオルガン作品の真髄でもある、
クラヴィア練習曲集第3巻の全曲録音が果たせた
ことは、オルガニスト冥利に尽きると言えよう。録音
中に、このオルガンが紡ぎ出す、色彩豊かな音色に
包まれた瞬間は、至福の喜びであった。その瞬間を、
ご一緒に味わって頂ければ幸いである。

(よしだ・めぐみ)

〈オルガンのストップリスト〉

Hoofdwerk		Rugwerk		Onderwerk		Borstwerk		Pedaal	
Praestant	16'	Praestant	8'	Viola	8'	Fluitgedekt	8'	Praestant	16'
Quintadena	16'	Roerfluit	8'	Praestant	8'	Praestant	4'	Subbas	16'
Octaav	8'	Quintadena	8'	Holpijp	8'	Roerfluit	4'	Octaav	8'
Roerfluit	8'	Octaav	4'	Quinta	6'	Spitsfluit	3'	Holpijp	8'
Octaav	4'	Fluit	4'	Octaav	4'	Gemshoorn	2'	Superoctaav	4'
Speelfluit	4'	Quintfluit	3'	Holfluit	4'	Superoctaav	2'	Vlakfluit	2'
Nasaat	3'	Superoctaav	2'	Quinta	3'	Quintanus	1 1/2'	Mixtuur	VIII
Superoctaav	2'	Sexquialtera	II	Woudfluit	2'	Nachthoorn	1'	Fagot	32'
Ruyschpijp	II	Scherp	IV	Superoctaav	2'	Sexquialter	II	Bazuin	16'
Mixtuur	VI	Cimbel	III	Tertiaan	II	Mixtuur	IV	Trompet	8'
Cimbel	III	Fagot	16'	Siflet	1'	Dulciaan	8'	Trompet	4'
Trompet	16'	Schalmey	8'	Scherp	V	Regaal	8'	Cornet	2'
Trompet	8'			Viola di Gamba	8'				
Vox Humana	8'			Trompet	4'				

Hoofdwerk-Rugw.	Tremulant HW-BP-BW
Hoofdwerk-Bovenpos.	Tremulant R
Hoofdwerk-Borstwerk	491.6 Hz
Bovenpos.-Borstwerk	
Pedaal-Hoofdwerk	



吉田 恵

東京藝術大学オルガン科及び同大学院修士課程修了、ハンブルグ音楽大学卒業。オルガンを島田麗子、廣野嗣雄、Z. サットマリー、W. ツェラー、チェンバロを

山田貢、通奏低音及び即興実技を鈴木雅明、室内楽をダルムシュタットの各氏に師事。1991年ブルージュ国際オルガンコンクールにてバッハ・モーツァルトブライスを受賞。92年北ドイツ室内楽シリーズに出演、CDのライブ録音に参加。J.S. バッハ・ライブツィヒ・コラル全曲演奏を北ドイツ・ベルゲドルフで行う。93年J.S. バッハ・トリオ・ソナタ全曲演奏会を修士課程研究演奏会として行う。94年4月、ハンブルグ聖ヨハネ教会コンサートシリーズに出演8月、

第一回ABCオルガンオーディションに合格。94年より日本でのコンサート活動を開始する。札幌、盛岡、新潟、静岡、愛知、宮崎各地のコンサートホールでの公演のほか、サントリーホール、カザルスホール、東京芸術劇場、府中の森芸術劇場、武蔵野市民文化会館等でも公演。98年愛知県立芸術大学にてJ.S. バッハ・クラヴィア練習曲集第3巻の演奏会つき公開講座、2007年12月にはアーティスト・イン・レジデンスとして公開講座、及びリサイタルを行う。2001年夏にはドイツのフライブルグ、シュタインキルヒェン、キールで公演。2004年12月から2010年3月まで日本大学カザルスホールにて、全12回のJ.S. バッハオルガン作品全曲演奏会を行う。1998年4月より2002年3月まで新潟市民芸術文化会館の専属オルガニスト、2006年4月より2009年3月までミュンヘン・ザルツブルグ・シンフォニーホール・ホールオルガニストを務める。

現在、愛知県立芸術大学、日本大学芸術学部音楽学科講師、吉祥寺カトリック教会オルガニスト。

● and **DSD** are Trademarks.

●DSDの音はSACD対応プレーヤーでお楽しみください。尚、本品はCDレイヤーをあわせ持った二層構造の「ハイブリット・ディスク」になっておりますので、通常のCDプレーヤーの多くのものでもCD品質の音でお楽しみいただくことができます。また、DVDプレーヤーの場合は、CD対応となっている機種でもかからないものがありますので、あらかじめ御了承ください。詳しい再生上の取り扱い方については、ご使用になるプレーヤーなどの取り扱い説明書をご覧ください。

＜取り扱い上のご注意＞●ディスクは両面共、指紋、汚れ、キズ等をつけないように取り扱ってください。●ディスクが汚れたときは、メガネふきのような柔らかい布で内周から外周に向かって放射状に軽くふき取ってください。レコード用クリーナーや溶剤等は使用しないで下さい。●ディスクは両面共、鉛筆、ボールペン、油性ペン等で文字や絵を書いたり、シール等を貼付しないで下さい。●ひび割れや変形、又は接着剤等で補修したディスクは、危険ですら絶対に使用しないで下さい。＜保管上のご注意＞●直射日光の当たる場所や、高温・多湿の場所には保管しないで下さい。●ご使用後、ディスクは必ずプレーヤーから取り出し、専用ケースに入れて保管して下さい。●ディスクケースの上に重い物を置いたり、落としたりすると、ケースが破損し、ケガをすることがあります。